3 泌尿器科がんにおけるがん関連疲労の有病率・重症度を調べる横断的研究 ―漢方の可能性を探る―

香川大学泌尿器科
土肥 洋一郎、可児　尚弥、本田　智子、原田　怜
松岡　祐貴、加藤　琢磨、岡添　誉、田岡 利宣也
常森　寛行、上田　修史、杉元　幹史

抄録

日常診療において、がん患者は「しんどい」と口にすることが多い。「しんどい」はがん関連疲労を示し、がんサバイバーにとってQOLや就労にも影響することが知られている。また、がん関連疲労によるがん治療の休薬や中止は、不十分な治療による効果の低下、さらには生命予後にも影響することが考えられる。がん患者の50％以上でがん関連疲労を有するとの報告があるが、実臨床ではその過小診断と過小治療が問題となっている。その理由は、がん関連疲労の病態に多因子が関与しているためで、さらに治療のゴールドスタンダードがないためである。

このような背景から、われわれは、がん患者の「しんどい」の見える化と支持療法としての漢方の治療効果を明らかにする研究を始動した。まず、日本語版Brief Fatigue Inventoryなど質問票を用いてがん関連疲労を定量化し、非がん患者と比較することで、がん関連疲労の有病率と重症度を評価する横断的研究を行う。次に、抽出した患者群に対して、がん関連疲労に対する漢方の有効性を検証する。

がん関連疲労の患者の50％がその「しんどい」症状について医療提供者になにか対応を求めているとの報告がある。つまり、がん関連疲労に対してはアンメットニーズが存在する。新しい治療薬や治療戦略でがん患者の生命予後は延長している中で、がん関連疲労の患者を抽出し支持療法を積極的に行うことは、これからの実臨床でますます求められると考える。